

ラトヴィア語における

《kā + 加工品名詞》成句の意味論的考察

田 中 研 治

要 約

ラトヴィア語における《X kā Y》成句は直喩形式として意味的な機能を果たす。《X》の成分が言表されるされないに拘わらず、《kā Y》の部分は自律性の高い直喩的成句構造として、独自の成句義を発揮する。成句が有している意味内容は、直喩の素材語《Y》の概念との著しい相関性（類比性）に基づくと考えられる。本稿では《加工品名詞》が《Y》の成分として組み込まれた成句例を考察の対象とし、《加工品名詞》の典型属性の観察に基づいて、直喩的な意味転用の方向性とその動機の提示を試みる。

0. はじめに

ラトヴィア語における成句表現 (frazologisms) のなかでも、形式上最も構造が単純で、かつ出現頻度が高いと思われる表現が《kā+基本語》成句である。この形式はいわゆる「直喩」(simile) に相当する表現であるが、特にその意味論的な機能の考察は興味深いテーマである。その形式と機能については前稿 (田中：1998) において既に概略を述べた。

前稿では《kā+動物名詞》の成句表現を取り上げた。そして各種の動物名詞が直喩的意味転用を基盤として、人間のどのような側面 (行動、性格、生態な

*2000年9月26日受理、2000年11月24日掲載決定。

ど)を描写するために適用されているかを考察し、意味分野別にそれらを提示した。本稿では《kā+基本語》成句における《基本語》の位置に、建造物を除く《加工品名詞》が現れる事例を考察の対象とする。なお前稿でも述べたとおり、ここでいう「基本語」というのはいわゆる「基礎語彙」ではなく、意味的に成句表現の中心となり、「鍵となる役割を担った単語」(atslēgas vārds)のことを指す。

《加工品名詞》が直喩成句表現の素材語(即ち譬えるもの)として組み込まれた場合、その事物概念、あるいは明示的(辞書的)意味が、どのような比喩的解釈の経路をたどり、本質的に異なる意味的カテゴリー中のいかなる事物や事象へと転用されているか、即ちどのような概念上の拡張と結びついているかを調べるのが今回の目的である。

方法論としては極めて単純なアプローチをとっている。簡単にいえば、まず比喩素材となる単語の事物概念を調べることによって、ある事物の典型性を支える典型属性を探り出す。そして次にその属性がどのような形で成句義の内容と関連づけられているか、即ち類比性に基づくどのような認識方法が認められるか、を明らかにすることである¹。手順の詳細に関しては8ページ以降で説明する。

なお、いうまでもなく直喩成句の意味理解に際しては、我々日本人にもよくわかる、比較的共通性や普遍性の高い事例もあれば、全く解釈の手掛かりすらつかめない独自性、個別性の高い事例も多く見受けられる。

ラトヴィア語の《kā ābols》という成句は「リンゴのように赤い」(*sarkans kā ābols*)とか「リンゴのような頬」(*vaigi kā ābols*)、「リンゴのように赤みがかかった」(*sārts kā ābols*)などのように、特定語句と隣接しあった環境で現れて、《健康的な丸まるとした赤い頬》という成句義を表す(なお、特定語句との隣接は絶対的条件ではなく、それが省略される場合も多い)²。この例では「リンゴ」が「健康な(人の)丸まるとした赤い頬」の譬えの基盤となり、素

材の役割を果たしていることが理解できる。その着眼点は「(頬の)丸くて赤い状態」と「リンゴの丸みと赤さ」の共通性を視覚的な経験に基づいて認識しているところにある。この「リンゴ」の例は比較的理解しやすく、日本人の認識ともほぼ一致しているのではないかと思われる。(ただし、日本語の「リンゴのような赤い頬」には「健康(そう)な」という連想は付随していないという人もいる。)この背景にはリンゴの色に関して、ラトヴィア人も日本人も「赤色」を連想するという共通性もあるような気がする。(ちなみに、フランス人は「緑」(vert)を連想する。)

一方、《balts kā ābele》(直訳：リンゴの木のように／な白い)という成句はどのような意味内容を持つものであろうか。「リンゴの木の白さ」が素材となっていることは確かだが、果たしてどのような対象を指しているのか(即ち意味の転用が意図されているのか)、我々日本語話者の主観的、日常的な感覚や経験に照らし合わせても容易に想像がつかない。

実はこの成句義は《完全に灰色の銀髪、あるいは完全な白髪の状態》を指す。ラトヴィア語話者はリンゴの木に対して、その高さや太さや匂いなどではなく、「木の白さ」、即ちここでは「リンゴの木に咲いている花の白さ」という色彩的属性に着目しているのである。結局、「リンゴの木に咲いている花の白さ」と「銀髪、白髪」を結びつける共通点(類似点)は、両者の「色の白さ」と「(頭の形に似た)こんもりとした木の形」が主観的に知覚されていることである。この場合、それがラトヴィア語話者に備わった、主観的な対象認識に必然的に関わっている目のつけ所なのである³。

上で述べた問題の根底には個別に存在する言語共同体(に属する言語話者)独自の認識方法が横たわっている。この認識方法は顕在的あるいは潜在的な様々な社会習慣や文化様式の領域とも相互関連性を有するもので、人間独自の経験的、主観的な外界認知の基盤ともなっている。

この意味で、特に様々な事物名詞を含むラトヴィア語の直喩成句の意味を考

察するには、言語的意味と事物概念の両面を同時に、あるいは交互に眺めなければならない。この方法は突きつめていけば、ラトヴィア語話者のメンタルレキシコンに蓄積されている、言語と思考様式の相関性のみならず、その背景となる民族性や文化様式との関連性の解明に手掛かりを与えてくれる（可能性のある）一つの基礎的なアプローチといえるのではないだろうか。

なお、kāの前後にどのような品詞が位置するかという、この成句の構造的な枠については今のところ十分な調査が進んでいないが、筆者がこれまでに概略調べたところでは、基本的な《kā+名詞》成句を含め、7～8種類の統語論的構造があるのではないかと思われる。今後取り組むべき課題の一つである。

今回も前稿と同様、資料を得るために参照したラトヴィア語成句辞典は次の文献である。以下『成句辞典』と略称する。

A. Laua, A. Ezeriņa & S. Veinberga (eds.):

Latviešu Frazeoloģijas Vārdnīca. (Vol. I [A–M], Vol. II [N–Ž])

(Rīga, «Avots»: 1996)

1. 人工物名詞の意味分類

加工品名詞は「事物」－「無生物」－「人工物（または製造物）」－「a. 加工品 b. 加工した物質 c. 建造物」という一連の意味分野の階層において、最後の下位領域の一部を構成する。

人工物名詞全体のなかで、加工品名詞がどのような位置を占めるかを確認するためにまず人工物名詞全体の構成を調べてみる。ここでいう《人工物》には、ある目的のために造られた製品、建造物というまでもなく、ある材料にわずかでも人間の手が加わって生み出された物品や、その形や状態が変わった物質や物体が含まれている。

関連する多くの人工物を分類するにあたって、5～8ページにみられるような概念を分類基準とした意味分野を設けた。そして上記の『成句辞典』中から抽出した人工物名詞を当てはめてみると以下のような結果を得た。このリスト

のなかで、下線を施した名詞は基本的な《kā+名詞》の成句構造を持っている。

なお、この成句構造中、名詞1語だけでなく、いわゆる名詞句の構造をなすものが多数みられるが、今回はそれらは考察の対象から除いた。

例えば、adata (針) の項目には、《kā adata》のような基本形以外に、《kā uz adatām》(直訳：針の上に [座って] いるように／な→成句義：落ち着かない、はらはらして、我慢できないで) や、さらに《kā caur adatas aci izvilks》(直訳：針の目 [穴] を通して [何かを] 引き出すように／な→成句義：[人が] 大変細くて瘦せた) などの成句があげてあるが、これらはいずれも今回の意味分析の対象には含めていない。

というのは、何らかの意味的な限定化や特殊化を受けないで、単数・複数の区別はあるとしても単独で kā と結合して成句を構成する場合の人工物名詞それ自体こそ、当該の言語社会における特有の見方(受け取り方)を直喩表現に濃厚に反映させている(即ち高い典型性を示す)と考えられるからであり、同時にそのような人工物名詞が備えている属性(形状、機能など)のうち、どの部分にラトヴィア語話者が主体的に意味的焦点を顕在化させているかが把握しやすいと考えられるからである。

《人工物の意味分野》

a. 加工品(建造物除く)

1. 乗り物(船舶含む) : ボート (laiva)、蒸気機関車 (lokomotive)、筏 (plosts)
2. 機具類 : 針 (adata)、ハンマー (āmurs/veseris)、鋏 (arkls)、鍵 (at-slēga)、バネ (atspere)、織機の横糸通し (atspole/šaudīkla)、斧 (cirvis)、蒸気機関 (dampis)、大鋏 (dzirkles)、挽き臼 (dzirn-akmens)、まぐわ (ecēša)、鉋 (ēvele)、砥石 (galoda)、熊手 (grābeklis)、錐 (īlens)、鎌 (izkaptis)、掛け釘 (kāsis/vadzis)、ペンチ (knaibles)、ストーブ (krāsns)、松葉杖 (kruķis)、麻打ち棒 (kulstīkla)、攪乳器 (ķērne)、楔 (ķīlis)、柄杓 (ķipis)、罌 (lamatas)、

- シャベル (lāpsta)、磁石 (magnēts)、釣竿 (makšķere)、機械 (mašīna)、魚をとる仕掛け罾 (murds)、釘 (nagla)、鞭 (pātaga)、鞆 (plēšas)、時計 (pulkstenis)、ロケット (rakete)、糸車 (račiņš)、ステッキ (spieķis)、鏡 (spogulis)、糸巻きリール (spole)、ロープ (striķis)、糸巻き車 (tītavas)、ロープ (valgs)、ノコギリ (zāģis)
3. 武器類：鎧 (brunas)、矢 (bulta)、短剣 (duncis)、大砲 (lielgabals)、パチンコ、石投げ器 (linga)、弾丸 (lode)、機関銃 (ložmetējs)、ナイフ (nazis)、ピストル (pistole)、ライフル銃 (plinte)、槍 (šķēps)、戦車 (tanks)、刀剣 (zobens)
4. 衣服類 (装身具、靴含む)：襟 (apkakle)、スカート (brunci)、帽子 (cepure)、手袋 (cimds)、毛皮コート (kažoks)、シャツ (kreklis)、王冠 (kronis)、靴 (kurpe)、マスク (maska)、革製履物 (pastala)、袖 (piedurkne)、木沓 (tupele)、ブーツ (zābaks)、ストッキング (zeķe)
5. 糸・布製品：糸 (diegs)、布地 (drāna)、靴下がわりの足巻き布 (kājauts)、旗 (karogs)、ぼろ布 (lupata)、カーテン (priekšcars)、ベルベット (samts)、毛足が長くて織目の細かい布 (vadmala)、リネン地 (veļa)、ウール地 (villa/vilna)、絹 (zīds)
6. 家具類：テーブル (galds)、椅子 (krēsls)
7. 照明具：ランプ (lampa)、ロウソク (svece)
8. 家庭・台所用品：コップ (biķeris)、スプーン (karote)、鍋 (katls)、フライパン (panna)、お盆 (aplatē)、花瓶 (podis)、櫛 (sekste)、篩 (siets)、箒 (slotā)、杵 (stampa)、ブラシ (suseklis)、お皿 (šķīvis)、揺り籠 (šūpulis)
9. 容器・収納道具：桶 (balla)、缶 (kanna)、袋 (maiss)、財布 (maks)、樽 (muca)、ビン (pudele)、バケツ (spainis)、箱 (šķirsts)、麻の籠 (vācele)、棺桶 (zārks)
10. 貨幣・贈り物：贈り物 (dāvana)、お金 (nauda)
11. 楽器：トロンボーン (bazūne)、太鼓・ドラム (bunga)、オルガン (ērģeles)、トランペット (taure)、ヴァイオリン (vijole)、ベル (zvangs)
12. 文房具：チョーク (krīts)、定規 (lineāls)、インク (tinte)
13. 紙製品・書類：切符 (biļete)、蠅取り紙 (mušpapīrs)、紙 (papīrs)、パスポート (pase)、著作物 (raksts)、伝票 (rēķins)、地ならし用ローラー (rullis)

14. 装飾品・貴金属：絵画(bilde)、人形(lelle)、ダイヤモンド(dimants)
 15. 娯楽・スポーツ用品：ボール(bumba)、映画(filma)、サイコロ(kauliņš)、玩具(paija)、トランプ(trumpis)、コマ(vilciņš)
 16. 事物の部分・部品：帆(bura)、錨(enkurs)、手綱(grozi/pavada)、柄(kāts)、握り手(kliņķis)、轡(laužņi)、ブレーキ(mīstīklas)、ボタン(poga)、車輪(rati)、レール(sliede)、弦(stīga)、プラグ(tapa)
- b. 加工した物質：食品、嗜好品、薬品、香料、油脂類
1. 食品：ソーセージ(desā)、ケーキ(kūka)、パン(maize)、パイ(plācenis)、粉(pulveris)、オートミール(putra)、バター付きパン(sviestmaize)
 2. 調味料：砂糖(cukurs)、胡椒(pipars)、塩(sāls)
 3. 薬物・嗜好品：タバコ(tabaka)、薬(zāles)
 4. 香料：香料(vīraks)
 5. 油脂類：油(eļļa)、クリーム(krējums)、蠟ワックス(pikis)、油脂(tauki)、石鹸(ziepes)
- c. 建造物
1. 非居住用の建物(大小)：教会(baznīca)、小屋(būda)、納屋(klēts)、城(pils)、風呂小屋(pirts)、脱穀小屋(rija)、馬屋(stallis)、射撃場(šautuve)、風車(vējdzirnavas)
 2. 住居用建物：家(māja)
 3. 屋根のない建造物：墓(kaps)、修道院の中庭(kloisteris)、囲み柵(žogs)
 4. 建物(内・外)の部分：祭壇(altāris)、屋根裏部屋(bēnini)、ドア(durvis)、シャワー(duša)、床(grīda)、天井(griesti)、ベッド(gulta)、屋根(jumts)、説教台(kancele)、支柱(kārts/stabs)、窓(logs)、柱(maikste)、レンガの壁(mūris)、地下貯蔵庫(pagrabs)、棚(plaukts/zārds)、食品貯蔵庫(redeles)、面格子(restes)、窓枠(rūts)、壁(siena)、舞台(skatuve)、煙突(skurstenis)、門(vārti)、ホール(zāle)
 5. 建築材料：板(dēlis)、ガラス(glāze/stilks)、レンガ(kieģelis)、モルタル(piesta)
 6. 仕事場としての建物：薬局(apteka)、銀行(banka)、肉屋(miesnieks)、裁判所(tiesa)、店(veikals)
 7. 娯楽の場所・建物：メリーゴーラウンド(karuselis)、居酒屋(krogs)
 8. 掘削した場所：井戸(aka)

9. 通行用の建造物：橋 (tilts)

10. 生産用建造物：レンガ焼きの窯 (ceplis)、製粉所 (dzirnavas)

2. 《kā+加工品名詞》成句の意味分析

上掲の分類からもわかるように、『成句辞典』の見出し語として収録されている人工物名詞のなかで、種類として最も多岐にわたっているのが、今回分析の対象とする《a. 加工品名詞》である。

「はじめに」の部分でも簡単に述べたが、分析手順として次の方法に従う。

(1) まず、問題の直喩成句義が「人間」という特定の意味的カテゴリーへと転用されているかどうかを調べる。成句義の記述中に、例えば“Saka par ... vīrieti”とあれば、「男性」(vīrietis)が意味的な適用の主体と捉えられ、また“Saka par cilvēku, kas ir...”と記してあるような場合は「人間」(cilvēks)が主体とみなされていることがわかる。また、“Saka, ja kāds ...”のような記述であれば、その意味は「もし誰かが....である場合にいう」に相当するので、当然人間への転用可能性が含意されている。意味的照応関係において、「人間」や「事物」、「事象」、「動物」など、特定カテゴリーへの限定的な適用が認められないと判断される場合には、[∅]の記号で表示する。

「人間」や「事物」などについて、さらに意味の特定化や細分化がみられる場合はできるだけ具体的な下位概念(例えば、「事象～声」のように)を記す。

(便宜上(1)を「カテゴリー」と呼ぶ。)

(2) 次に成句の意味内容を記述する。『成句辞典』の成句義記述はごく一般的な表現になっている。即ち、「(主として)...の場合にいう」とか「(一般的に)...について使われる」とか「もし...のような時があれば使う」といった解釈を経なければならない場合がほとんどである。即ち、成句の背後に隠された表現意図の説明や使用場面を指示する方法である。また一方では、単に同義語を列挙するだけの場合もあるし、強意的直喩に相当する意味を一つだけ示し

ている時もある。以下においては、できるだけ忠実に『成句辞典』の記述に従うが、便宜上「～の場合にいう」などの表現は省略する。

(3) 次に問題となる加工品の「典型属性」を調べる。この時、加工品名詞の辞書的意味（語義）を調べることも一方では必要になるかも知れないが、その語義内容は必ずしも「典型属性」を記述していないこともある。場合によっては、実物の写真や図を百科事典などで参考にしなければならない。本稿では、英語対訳の児童用図解辞典 *Bērnu Vārdnīca: Latvian Heritage Dictionary* (Toronto: Éditions Rényi Inc., 1989) を補助的に適宜利用する。

(4) 最後に、成句義の内容が、「典型属性」のうち主としてどの属性を相対的な基盤として意味的に転用された結果なのかを調べる。（便宜上「直喩の意味的動機」と呼ぶ。）

(2)と(3)の事項間の意味的な相互関連性を説明することによって、直喩成句を存在足らしめている比喩的解釈の段階(4)に至るのであり、特にこの段階はラトヴィア語話者の主体的、経験的な外界認識と知覚方法が直接的（あるいは間接的）に関与していると予想される段階である。ただこの時点では、日本語話者である筆者の（日本的）解釈や視点を強調し過ぎることはできるだけ避けるように注意しなければならないので、あくまでも手持ちの資料の分析と解釈の範囲を基本にしたい。

55種類の加工品名詞すべての分析を行うのはスペースの関係で不可能なので、次に異なったタイプの若干の例を挙げて分析を試みる。

2-1. 《kā adata》（針のように／な）

(1) カテゴリー：[人間]

(2) 成句義：《仕事熱心で、活発で、機敏で、器用にこなす人》

(3) 針の典型属性

①形状属性：[先端が鋭くとがっている]、[一方の先端に糸を通す穴がある]

②使用（目的、様態）の属性： [物に突き刺す]、 [動きながら物を縫い付ける／留める]

③素材属性： [金属など]

(4) 直喩の意味的動機

[人間（の勤勉さ）] への転用を直接に動機づける要素は、典型属性のなかにはみあたらない。また辞書に収録されている語義のなかにもない（下の解説2を参照）。

筆者は次の経路を考える。

②の属性： [動きながら物を縫い付ける／留める] の部分が、「針が連続して何かを縫う動作」という二次的屬性として拡張される。さらにその要素が「針のように連続してある動作をする人」→「休まず熱心に仕事をする人」という意味的再解釈を経て、人間への焦点化が発現したものと考えられる。

即ち、「針が何かを縫い続ける動作」を「休まず仕事をする人」に見立てている点に意味的な類比の視点が感じられる。なお、LLVV(1972)の語義説明中に、(Iet, arī kultas) kā adata --saka par kustīgu, darbīgu cilvēku. (直訳：針のように [動く、または進む] --活発で、勤勉な人のことを言う) と書いてあるので、針の動きが注目されていることがわかる。

解説1：一般的に、共感覚による比喩現象は世界的に共通性が高いので、この事例でも、「針に触れたときの鋭い痛み」（痛覚）が成句義（の一部）に反映している（「頭の鋭い人、機転が利く人」など）かどうか、今のところよくわからない。

英語では、(as) sharp as a needle が「頭の働きが鋭い」という意味を有している。

解説2：adata の辞書的意味は次のとおり（用例省略）。

1. Rīks šūšanai -- irbulis ar smailu galu un caurumu diega ievēršanai.
（物を縫うための道具--先端は鋭くとがり、穴をあけて糸を通す道具）
2. Priekšmets ar nosmailinātu galu, irbulis (arī liekts, ar pairesnīnājumu galā u. tml.) -- saspraušanai, rotājumam, dažādiem darbiem.
（鋭くとがった先端を持つ物 [または一方が曲がって太くなっている場合もある] --何かを留めたり、飾りつける場合などに使わ

れる)

3. Detaļa ar nosmailinātu galu (aparātā, mehānismā) (鋭くとがった先端部分 [道具や機械の])
4. Ass, smails izaugums. (鋭くとがった生成物) (*Latviešu Valodas Vārdnīca*, 1987)

2-2. 《kā atspole》(杼 [織機の横糸通し] のように/な)

- (1) カテゴリー: [∅]
- (2) 成句義: 《停止することなく、すばやく、器用に》
- (3) 杼の典型属性
 - ①形状属性: [細長い舟形]
 - ②使用(目的、様態)の属性: [織機の部分]、[縦糸の間に横糸を織り込む]、[左右への往復運動をする]
 - ③素材属性: [木]
- (4) 直喩の意味的動機

②の属性が直接的な転用の動機として働いている。[左右への往復運動]が「連続した急速な運動」という意味で焦点化している。

解説1: 「急速な運動」を含意するので、意味的に、例えば *šaudīties* (すばやく動く) などの動詞と頻繁に共起する。

解説2: 「杼」の本来的な動きの特徴は [左右へのすばやい往復運動] であるが、時間の経過とともに、もはや [左右への] という特徴の一部は失われており、今日の標準的な用法は、前後、左右、上下など、どの方向への運動も含意される。Laua はこの例を取り上げ、この場合は「動きの方向性」に関しては「一般化」の傾向を示す事例であるといっている (Laua: 1985: 236)。

解説3: *LLVV* (1972) の語義記述を見ると、そのなかに成句形として次の形と意味が与えられている。

šaudās (arī tek) kā atspole--saka par izveicīgu, čaklu, arī kustīgu cilvēku (直訳: 杼のように素早く動く [あるいは連続して動く] -- 敏捷で、勤勉で、活発な人のことをいう)

この説明では、《kā atspole》の成句義は人間に限定されているような印象を与えるが、『成句辞典』には人間以外の事物(例えば「馬」)の様態を叙述した例もあるので、本稿では(1)の項目については、人間

だけに限定しないで、広く「あるものの動き」と解する。

2-3. 《kā bazūne》(トロンボーンのように／な)

- (1) カテゴリー：[事象～声]
- (2) 成句義：《非常に力強く、大きな声》
- (3) トロンボーンの典型属性
 - ①形状属性：[U字形の移動式管をもつ]
 - ②使用(目的、様態)の属性：[演奏用の音を出す楽器]、[U字形の管を前後に伸縮させ、本体の一部から息を吹き込んで音を出す]
 - ③素材属性：[金属]
- (4) 直喩の意味的動機

②の属性に含まれる「音を出す」という特徴が焦点化して、音の下位区分である「声」に転用される。「力強く、大きな声」に重点が置かれるのは、トロンボーンが他の楽器と比べて、音量が大きいからであろうか。
 解説：「楽器」が比喩素材に使用された場合は、必ずしも上のように「声」を転用先に持つ訳ではない。

例えば、《kā ērgeles》(オルガンのように／な)という成句も上と同様の成句義を持つし、《kā taure》(トランペットのように／な)もほぼ同様の内容で、《大きな音、遠くまで聞こえる鋭い声》を意味する。

しかし一方、同じ楽器の種類でも、《kā bunga》(太鼓のように／な)はかなり異なった意味転用を示し、《誰かが(食事をして)満腹の状態》を表す。太鼓の形状を基盤とする意味的動機の発現と考えられる。

(日本語でも「太鼓腹」というが、これは外観的な形状だけで、満腹状態は意味しないようである。)

2-4. 《kā cimudu》(手袋のように／な)

- (1) カテゴリー：[∅]
- (2) 成句義：《何かを簡単に負かす、服従させる、思いどおりにする》
(なお、cimuduの語形は対格[単数]である。)
- (3) 手袋の典型属性
 - ①形状属性：[手の形をしている]
 - ②使用(目的、様態)の属性：[手の防寒、保護、装飾など]、[手全体を内部へ入れる]、[手に密着して覆う]
 - ③素材属性：[革、布、毛糸など]

(4) 直喩の意味的動機

筆者の推測であるが、この事例では、②使用属性に基づいているようである。手袋を自分の意志や、周囲の状況によって自由にはめたり脱いだりすることが典型属性のなかに含まれていると考えられる。一種の道具としての自由な着脱動作に重点が置かれているのではないか。あるいは、「手が主で手袋は従」のような考え方が基盤になっているのかも知れない。(即ち、手袋をはめると、それは手の動きそのものに順応することになる。)

解説：動機の内容に関してはなお曖昧さを感じるので、この事例は次節の末尾の(D)として類別する。

3. 典型属性を基盤とする直喩の意味的動機の提示

これらわずか4種類の成句の分析を通してわかるように、直喩の意味的動機自体は内容的に千差万別であるという印象を受ける。問題となる加工品の性質、形状、用途などの個別性を考えれば当然のことであろう。ただこの時点で共通点として指摘できるのは、4例とも②の「使用属性」に動機づけの根拠があるらしいということである。

原則として、鍵となる基本語が示す実体概念(あるいは虚構概念や抽象概念)の受け取り方、見方の重点がどの種類の属性(あるいはどの属性寄り)に置かれているかを厳密に予測することはできない。仮にできたとしてもそれは絶対的な性質のものではない。成句義の実質的な中身を調べることによって初めて対応する属性の目星をつけることができるからである。

2-3. の解説で述べたように、楽器の見方はその一例である。同じ楽器という意味分野に属す加工品であっても、例えば打楽器と金管楽器とではラトヴィア語話者にとっては受け取り方がそれぞれ異なっていて、その結果、直喩成句義としては各々特有の動機づけが観察できる。

前節で示された分析手順を踏んで、残り約50語の分析を行った結果を、以下に述べるような簡略化した形で提示する。

即ち、スペースの制約もあり、分析手順(2)、(3)を踏まえたうえで、全体的にその相互関連性（類比や類似性に基づく意味的動機）が明示されるような記述を試みる。その際数種類の典型属性を基準とする分類を行う。基準となる属性については、前節での分析からわかるように、加工品名詞の場合、極めて限られた種類を設定するだけでいいのではないかと思われる。

なお、[人間]への転用が認められる成句義には下線を施す。[人間]の身体部位や状態、性格などへの転用が認められる場合は、破線による下線を施す。同種カテゴリーへの転用が認められる例はほんの少数であるが、括弧に入れて表示する（例：kā kajauts）。特に説明が必要と思われる場合は、「解説」を付記する。8ページでも述べたように、[人間]や[事物]などについてさらに意味の特定化や細分化がみられる場合はできるだけ具体的な下位概念を記す。また、意味的照応関係において[人間]や[事物]、[事象]、[動物]など、特定カテゴリーへの限定的な適用がみられない場合には、[∅]の記号で表示する。

今回どうしても説明可能な相互関連性がみいだせ（そうに）ない事例は最後の(D)に提示する。

以下、次の3種類の属性を設定する。「素材属性」については、以下の分析でもこれを根拠とする動機はみあたらないので省略する。

(A)形状属性 (B)性状属性 (C)使用（目的、様態）の属性

(A)形状属性（前後に矢印のある [] 内に属性を記述する）

(A)－1：《kā balla》（桶のように／な）→ [丸みがある、ずんぐりした]
→ [人間～女性] 《太った女性》

解説：「桶」と「太った女性」を結ぶ意味的動機は [丸みがある、ずんぐりした] という属性を介して成立すると考える。以下の諸例においても、矢印の方向に沿って同様な解釈を経るものとする。

(A)－2：《kā galds》（テーブルのように／な）→ [表面が平坦で滑らか]

→ 《1 : [∅] 大変平坦な、滑らかな 2 : [事物～魚] 大変大きな魚》

解説：galds の原義は「板」であり、板を鉋などで平らにしてテーブルが作られている。2 に関しては、テーブル表面の平坦さよりも、テーブルの「大きさ」に焦点が置かれる。

(A)–3 : 《kā ilens》(錐のように／な) → [柄の先端に鋭い金属部がついている] → 《1 : [∅] 大変鋭く、尖っている；細くて痩せた 2 : 泥酔した》

解説：成句義 2 に関するの意味的動機は今のところ不明。

(A)–4 : 《kā lāpsta》(シャベルのように／な) → [長めの柄の先に幅の広い部分がある] → 《大変大きくて、幅が広く、がっしりした》

解説：例文では肩、腕、舌などに言及する。

(A)–5 : 《kā lelle》(人形のように／な) → [美しい衣装を身につけている] → [人間～女性] 《特別に美しく着飾った女性》

(A)–6 : 《kā maiss》(袋のように／な) → [中には空洞の部分がある] → 《ある人の服が大きすぎて身体に合っていない》

(A)–7 : 《kā muca》(樽のように／な) → [丸みがある、ずんぐりした] → [人間] 《丸まると太った人》

(A)–8 : 《kā nagla》(釘のように／な) → [先端が尖った短く真っすぐな金属棒] → [人間] 《正直で、勤勉な人》

解説：[真っすぐな] という属性の一部が転用される。

(A)–9 : 《kā papīrs》(紙のように／な) → [厚さがなく薄い] → [∅] 《大変薄い》

(A)–10 : 《kā rullis》(地ならし用ローラーのように／な) → [丸くて太い] → [∅] 《ずんぐりして丸まるした》

(A)–11 : 《kā siets》(篩のように／な) → [穴がたくさんあいている] → 《1 : [∅] 大変穴の多い、欠陥だらけの 2 : [事象～睡眠] 浅い眠り》

解説：《浅い眠り》を比喩的に意味する根拠については不明。

(A)–12 : 《kā slota》(箒のように／な) → [柄の先に密集した毛状の部分がついている] → 《こんもりとして、量の多い物》

解説：「あごひげ」などの叙述に使用する。

(A)–13 : 《kā striķis》(ロープのように／な) → [曲がりくねった形状]

→ 《1：[動物] 蛇や鰻などの大きさ、長さ、多数を強調 2：大
変酔っ払った》

解説：2の意味については「体がぐにゃりと曲がっていて、真っすぐ
立てない」からであろうか。

(A)–14：《kā suseklis》(ブラシのように／な) → [柄の先に密集した毛
状の部分がついている] → [∅] 《何かが密集して生えたり、成長す
る》

(A)–15：《kā tanks》(戦車のように／な) → [大型で重い] → [∅] 《大
変大きくて重い、手に負えない》

(A)–16：《kā vadmala》(毛足が長くて織目の細かい布のように／な) →
[長い毛足が密集している] → [∅] 《何かが多量に成長して(実っ
て) いること》

(B) 性状属性

(B)–1：《kā bilde》(絵画のように／な) → [壁などに固定する]、[人
物、風景などが描かれている] → 《1：[∅] 大変美しいもの 2：
じっとして動かないで、怠惰な》

解説：2の方は軽蔑的用法。

(B)–2：《kā dimants》(ダイヤモンドのように／な) → [美しく輝く]
→ [∅] 《大変美しく光り輝く》

解説：(A)の属性とも関連する。

(B)–3：《kā drāna》(布地のように／な) → [表面が白い] → 《大変青
白い》

解説：例文から判断して、ほとんどの場合人間の青白い顔色を指すよ
うである。

(B)–4：《kā galoda》(砥石のように／な) → [高密度で大変固い] → 《1：
[∅] 大変固い 2：([事物～パン]) 生焼けのパン》

解説：2：《生焼けのパン》とは「中身が発酵不足で粘土状になり、
外側が固い状態のパン」のことであろう。

(B)–5：《kā krīts》(チョークのように／な) → [白い色が一般的] → [∅]
《大変白い》

(B)–6：《kā spogulis》(鏡のように／な) → [表面がなめらかで光って
いる] → [∅] 《大変なめらかで光沢がある》

解説：(A)の属性とも関連する。

(B)-7：《kā zīds》(絹のように／な) → [なめらかな布地] → [∅] 《大変柔らかく、きめが細かく、滑らかで、光沢がある；大変美しい》

(C) 使用（目的、様態）の属性

(C)-1：《kā atspere》(バネのように／な) → [伸縮力を利用して弾みのある動きを発生させたり、外からの力を弱める] → [∅] 《機敏に、素早く、器用に、張り詰めて；弾力がある》

解説：《張り詰めて》という成句義は、「バネ全体が伸び切っていていつ縮むかわからない」ような動きの様態の一面と関連するのではないか。

(C)-2：《kā bulta》(矢のように／な) → [高速で飛行する] → [∅] 《急速に動く》

(C)-3：《kā ecēša》(馬鋏のように／な) → [鉄の歯を土に食い込ませて前進する様態] → 《容赦のない、鋭い、攻撃的な、口うるさい》

(C)-4：《kā kājauts》(靴下がわりの足巻き布のように／な) → [歩行することによって汚れる] → ([事物～布]) 《大変汚れた布地》

解説：(B)の属性とも関連する。

(C)-5：《kā knaiblēs》(ペンチ [で挟まれた時] のように／な) → [力が加えられた結果、対象物がペンチの一部と密着し固定される] → [∅] 《ぴったりくっついて、固定されて》

(C)-6：《kā linga》(石投げ器 [パチンコ] のように／な) → [何かを素早く打ち出す] → [∅] 《大変素早く、敏捷に》

(C)-7：《kā lode》(弾丸のように／な) → [高速で飛ぶ] → [∅] 《1：大変素早く、敏捷に 2：真ん丸の》

解説：2は(A)の属性とも関連する。

(C)-8：《kā lokomotive》(機関車のように／な) → [運転時に大きな音を発生する] → 《フーフーと荒い息遣い（呼吸）をする》

解説：主に [人間／動物] への転用を示す。

(C)-9：《kā ložmetējs》(機関銃のように／な) → [連続して弾丸を発射する] → 《ある人の話し方が大変速い》

(C)-10：《kā mašina》(機械のように／な) → [ある動力によって作業を行う装置] → [∅] 《中断せずに、連続して》

解説：成句中の mašina は、その [(連続して) 作業をする] 属性に重点が置かれている。例えば、《iet kā mašina》は《だれかが休まず素早く器用に仕事をこなす》の意味である。

- (C)-11：《kā nazis》(ナイフのように／な) → [鋭い刃で物を切ったり、突き刺す道具] → [∅] 《大変鋭い；機敏で、行動的で、大胆な》

解説：例文中には、Saules zilba ir asa kā nazis. (直訳：太陽の光はナイフのように鋭い) のような例がみられるので、共感覚的な比喩的意味がここには現れている。(B)の属性とも関連する。

- (C)-12：《kā paija》(玩具のように／な) → [小型の子供用の遊戯道具] → [∅] 《小さくて扱いやすい物のように何かを簡単に使う》

- (C)-13：《kā pātagas》(鞭のように／な) → [敏捷で、しなやかな動き] → [事物～足] 《敏捷で器用な動きの足》

- (C)-14：《kā plēšas》(鞆のように／な) → [空気を取り入れて、強い風を送る動きを伴う] → 《1：[∅] 力強く何かを膨らませる 2：頑丈で、健康な状態》

解説：2の意味では、しばしば plaušas (肺) を伴う。主に [人間／動物] への転用を示す。

- (C)-15：《kā poga》(ボタンのように／な) → [服などのある部分を留める留め具]、[服などの生地に着している] → 《頭を簡単に切り落とす》

解説：服に着しているボタンは力を加えれば簡単に衣服本体から離れてしまうことが比喩的な連想の焦点になっているのであろうか。そう解釈すると《kā poga》は「ボタン (が取れてしまう時) のように／な」という意味になる。主に [人間／動物] への転用。

- (C)-16：《kā pulkstenis》(時計のように／な) → [休まず動く]、[正確で誤差なく時間を示す] → 《1：([事物～装置]) 正確に動く装置 2：[人間] 利発で、活動的な人》

- (C)-17：《kā rakete》(ロケットのように／な) → [高速で飛行する] → [∅] 《急速に、素早く》

- (C)-18：《kā spoguļi》(鏡の [中に写る] ように／な) → [表面が物を写す] → [∅] 《はっきり目で見てわかる》

- (C)-19：《kā spole》(糸巻きリールのように／な) → [素早く回転する] → [∅] 《大変素早く、器用に》

- (C)-20 : 《kā stīga》(弦のように／な) → [強く張りつめて使用する] →
 《1 : [∅] 大きな不安や緊張がある 2 : 姿勢を真っすぐにして
 3 : [∅] 直線的な》

解説：2、3は使用時の弦が強く、直線的に張られた形状に注目している。(A)の属性とも関連する。

- (C)-21 : 《kā svece》(ろうソクのように／な) → [真っすぐに立てて使う] → 《真っすぐな姿勢の、堂々とした、不動の》

解説：(A)の属性とも関連する。

- (C)-22 : 《kā tīvas》(糸巻き車のように／な) → [回転する] → [事物～足] 《不安定な動きの足 (軽蔑的)》

(D) 意味的動機を見いだし難い事例

- (D)-1 : 《kā cimudu》(手袋のように／な) → [∅] 《何かを簡単に負かす、服従させる、思いどおりにする》(2-4. の分析参照)
- (D)-2 : 《kā lupata》(ぼろ布のように／な) → 《大変臆病で気が弱い、無力な； [人間] 意志の弱い人》
- (D)-3 : 《kā maks》(財布のように／な) → [∅] 《何かの行為が大変強烈なことを描写》
- (D)-4 : 《kā ratiņš》(糸車のように／な) → [事象～生活] 《楽しく明るい家庭の雰囲気などの描写；器用さ、成功》(方言的)

4. おわりに

以上の分析では、ラトヴィア語話者がそれぞれの加工品を直喩の素材語と考える時、その素材の実体的な特徴(属性)のどの側面に注目しているかを探ろうとした。個別に存在する加工品名を、直喩という言葉の形式的な制約の中に取り込む訳であるから、そこには当然何らかの言語的工夫がみられる。また言語的工夫には意識上の動機が必要である。我々日本語話者からみると全くの恣意性に基づいているとしか考えられない直喩でも、逆にラトヴィア語話者独自の視点や認識方法に支えられているはずであるから、そこには有縁性(iconicity)が作用していると考えざるを得ない。有縁性に基づく言語的工夫が直喩

を支えているといえようか。

要するに、人間の認識（方法や結果）を言語表現の型にはめる際に認められる意味解釈の独自性といってもよい。独自性は一方では新しい意味の創出につながる。意味の創出は単に作家や詩人の独占物でもなければ、同時代的な物の見方、考え方だけが契機となる訳ではない。生活習慣や行動様式を含めた広範な文化状況（様式、程度）の影響によっても引き起こされる。

我々日本語話者の視点から眺めれば、その意味の創出が見当もつかないような意外性と結びついたり、時には独自性の故に我々の理解を阻むことすらありうる。(D)の項に列挙した例はそれに相当すると筆者は考える。ただしこの判断には、それぞれの加工品が内包するいわゆる暗示的（周縁的）意味（connotation）や百科事典的な意味、あるいは事物本体に関する筆者の知識不足もある程度影響していると思われる。

上のように、典型属性を基準とした直喩的な意味経路の説明は、あくまでも最も抵抗の少ない説明のための、いわば利便的な方法である。というのは事物の属性といってもそれらは必ずしも即物的に切り取られた、独立性の高い要素ではなく、互いの属性間には本来なにかしかの連続性があるからである。従って実際はただ一つの属性だけが、機械的に意味的動機を満たすために関わる訳ではない。例えば、形状についての属性が顕著に感じられないからといって、問題の加工品が形状を持たない訳ではないし、またラトヴィア語話者が全くそれを認識していない訳でもない。場合によっては、複数の属性が意識された例も上ではみられる（例えば、(C)-7：《kā lode》の場合は、(A)、(C)の両属性が動機の基盤となっている）。いわばそれは意識化と焦点化の分散程度、あるいは優先順位の問題であろう。

以上の分析を通じてわかったことの一つは、前稿（田中：1998）で考察した「動物名詞」の場合ほど人間自体への意味の転用が多くないということである。「動物名詞」では25種類前後の明らかな「人間転用」（humanization）が

観察されたが、「加工品名詞」に限定すれば、それは7種類程度である。また、人間の身体部位や状態、性格などへの転用を含めたとしても、19種類程度である。また、「動物名詞」の場合は、「男性」、「女性」両性への意味転用が数種類みられたが、今回は「女性」が2例あるだけで、「男性」への転用は全くなかった。

「動物名詞」と「加工品名詞」では扱った語数の違いなどもあって、「人間転用」についての比較は極めて表面的なものであるが、この現象の背後には2つの意味的カテゴリーの間にみられる本質的な特徴の相違が現れている。即ち、ここには動物一般が持つ属性「有生性」(animacy)と加工品のもつ「非有生性」(inanimacy)という両極端にある属性が関連していると考えられる。

日常生活における人間と「動物」や「加工品」との距離感覚や親近性も重要な要素かも知れないが、人間は人間に備わった本源的な「有生性」を最も基本的な共通の属性とみなす傾向を持つようであり、その意味を踏まえれば、人間と動物の有縁性(iconicity)は加工品との間のそれに比べて一層高いと思われる。

また属性のなかでは、「使用(目的、様態)」の属性が動機づけの根拠として最も頻度が高いことがわかる。次いで形状属性が高い。これは要するに対象とした「加工品」の大部分が、日常生活に密着した「機具類」、「武器類」、「衣服類」、「家庭用品」など、いわゆる生活用品類(あるいはそれに準じる道具類)に属しているため、「もの」と「ことば」の間に横たわるイメージの増幅と関係しているのであろう。

人間がみずからの使用意図や目的、有用性などを満たすために作り出した道具や生活用品類は、たいていが人間の手足を使って操作したり、活用したりするものである。それらは日常生活において使われることにより、人間との距離が縮まり、人間生活に融合した結果(あるいはその過程において)、その独自の存在意義と利用価値を認められるのである。

一般的に日常生活において、人間は最もよく目にしたり、耳にしたり、手で触れたりするような機会が多いもの、即ち感覚的に頻繁に経験する属性を最も優先的にその事物と関連づけようとする傾向があるといわれるが、上で示した動機の分布においてもそれと結びつく結果がみられるのではないかと思われる。

「使用」属性のなかで、最も頻繁に意識されているのは「運動性」である。(C)に類別された22項目のうち、かなり多くの加工品の運動性が注目されている。特にそれらの「素早い動き」に焦点が集中している。動きは道具のもつ中心的な典型属性である。「杼^ひ」(2-2で分析)をはじめ、「バネ」、「鞭」、「ロケット」、「糸巻きリール」、「矢」、「石投げ器」、「弾丸」、「機関銃」がそのための素材語となっていることは明らかである。「動物名詞」の場合も、動物の行動、動作の面に意識を集中させ、それを人間(や他のもの)の「動作(の遅速)」に見立てる例が多かったことを指摘したが、その点では加工品のなかの「機具類、武器類」と共通している。

「形状」属性について表面的に眺めた場合、特別強調すべき事柄はなさそうである。(A)に類別されたほとんどの加工品はその典型的な形態が焦点化の対象になっている、というかなり平凡な結果である。結局これも加工品の「見た目、外観、姿」という、人間の視覚的認識に訴える典型属性が顕著性を発揮した結果、月並みではあるが上のような動機を成立させているといえる。

しかし細部にこだわれば、なかには日本語話者には容易に推測のつかない例も交じっていることも確かである(例:「桶」(batta)はなぜ女性だけに適用されるのか、この単語の性別は女性名詞であることと関係あるのか、「錐」がなぜ「泥酔状態」に転用されるのか、「篩」がなぜ「浅い眠り」に転用されるのか、など)。ただ今回の調査では、細部にこだわられるだけの十分な言語資料の裏付けを筆者は持ち合わせていない。

(D)に分類された項目については、いわゆる周縁的意味(含蓄)や連想、ある

いは民俗学のおよび文化的事実や資料などによっても意味的な動機のミッシング・リンクを発見し、裏付ける必要がある。このような、一見日本語話者にとっては極めて不透明な意味的動機を含んでいると思われる事例こそ、まさに「死んだシミリー」(dead simile) と呼ばれるにふさわしいかも知れないが、逆にいえば、それらは通時的变化をくぐり抜けて今なお生き続けると同時に、生活文化の伝統を頑なに背負っている一種の「文化依存成句」(Kulturphraseologie) と呼べる性格を濃厚に宿しているのではないだろうか⁴。

註

1. このような考え方は、安井稔の次のような所論を読んで触発されたことがきっかけになっている。

「このよう見てくると、いわゆる強意的直喩 (intensifying simile) とされるシミリー、例えば、busy as a bee/ cool as cucumber/ dead as a doornail/ proud as a peacock/ quiet as a mouse などの場合も、単に、習慣的な固定した強意用法のシミリーとし、それ以上の考察を加えようとししないのは、不十分な扱いであるというべきであるかもしれない。特に意味内容をもたない慣用的固定表現とするのは、むしろ、惰性的解法であって、ある場合には、そのシミリーの背後にメタファーを感じてもよい、あるいは、感ずべきであるとするべきであるように思われる。cool as cucumber (落ち着き払った、この上もなく冷静で) というのは、cool と頭韻を踏む語の中から、でたらめに cucumber を選んで、でき上がったシミリーではなく、a cool person というメタファーがあると同じように、きゅうりは、その内在的特性として、cool であると、メタファー的に、考えられていたとしてもよいように思われる。」(安井稔：1978：146-147)

2. A.Laua はこのような特定語句の隣接という環境条件をラトヴィア語成句全般の認定に際しての重要な要素とみなしている。そして彼女はその基本的な考え方を「隣接理論」(apkaimes teorija) と呼んでいる (Laua：1996：6)。
3. ラトヴィア人が伝統的に「リンゴの木」にどのような象徴性を伴う意味付けを行っているか、またラトヴィア民謡ではどのような比喩解釈が可能であるか、などの問題を考察したのが Rūķe-Draviņa (1989：169-185)である。
4. 本来この術語は Gyula Décsy がその著書 *Die linguistische Struktur Europas*. (Wiesbaden, 1973, p. 222)において使用したもの。Rūķe-Draviņa は「ラトヴィア語成句の通時的变化」

という論文 (1985 : 227) においてこの概念に言及している。

参考文献

- Bendiks, H., *et al* (eds.) 1972-1996. *Latviešu Literārās Valodas Vārdnīca*. I-VIII. Rīga : Zinātne.
(LLVV と表示)
- Cordner K. L., *et al* (eds.) 1989. *Bērnu Vārdnīca : Latvian Heritage Dictionary*. Toronto : Éditions Rényi Inc.
- Guļevska, D. (ed.) 1987. *Latviešu Valodas Vārdnīca*. Rīga : Avots.
- Laua, A. 1985. 'Daži vērojumi semantiskas izpētē latviešu frazeoloģijā.' in *Baltu valodas senāk un tagad*. (eds. A.Blinkena *et al*) Rīga : Zinātne.
- Laua, A. *et al* (eds.) 1996. *Latviešu Frazeoloģijas Vārdnīca*. I-II. Rīga : Avots.
- Mühlenbach, K. 1923-32. *Lettisch-deutsches Wörterbuch*. (Redigiert, ergänzt und fortgesetzt von J.Endzelin.) I-IV. Rīga: Izglītības ministrija/Kultūras fonds.
- Rūķe-Draviņa, V. 1985. 'Diahroniskās maiņas latviešu frazeoloģijā.' in *Baltu valodas senāk un tagad*. (eds. A.Blinkena *et al*) Rīga : Zinātne.
- Rūķe-Draviņa, V. 1989. 'The Apple Tree in Latvian Folk Songs.' in *Linguistics and Poetics of Latvian Folk-Songs*. (ed. V. Vīķis-Freibergs) Kingston & Montreal : McGill-Queen's University Press.
- 田中 研治 1998. 「ラトヴィア語における《ka+動物名詞》表現—その直喩的意味の検討—」
『神戸薬科大学人文研究』23, 1-29.
- 安井 稔 1978. 『言外の意味』 研究社